

南京国際平和討論会に出席して

昨年秋の九月二日、大阪の関西国際空港一二時二〇分発南京ゆき中国東方航空531便は、座席八割ほどの乗客だった。

想えば、南京市を訪ねるのもこれで五回目になる。最初は一九七一年の夏、今からだと三六年前であった。まだ「プロレタリア文化大革命」の最中だったが、この旅行の目的は主として日本に「侵略された側」としての中国の具体的状況を知るためだった。

取材の大部分は侵略の直接的被害者たちから体験を聞き歩くことに費やされた。同じ敗戦国でもドイツと異なり、侵略の実体・内実がそれまで日本国民にはほとんど知らされていなかったのだ。取材地域は日本の植民地にされた東北地方（旧「満州」）が中心だったが、北京近郊の農村や上海・南京も訪ねた。結果は「中国の旅」と題して『朝日新聞』に連載ののち、単行本としてもまとめられ、現在は朝日文庫版のほか『本多勝一集』（朝日新聞社）第一四巻に収録されている。

この記事の反響は、それ以前の「カナダ・エスキモー」など『極限の民族』シリーズと全く異なり、多

くの賛辞と同時に脅迫状や非難の手紙も寄せられ、偽右翼の機関紙誌のほか株式会社文藝春秋の月刊誌や単行本による批判・非難・攻撃も二〇年間ほどつづいた。（おかげでさらに新資料も発掘された点は有難かった。）

こうした中で、攻撃の最も激しい標的とされたのは南京大虐殺の記事である。皇国史観文化人や侵略否定派文筆業者によって延々と書きつがれた。世界に恥をさらすだけのそんな国辱的風景に、真正右翼を自認する私（注）は「愛国心」を抑えきれず、それではもっと徹底的にと、南京大虐殺だけを集中的にとりあげることにした。『中国の旅』での南京取材では、二日間に四人と会ったただだったからだ。

以後、『中国の旅』のときを含めてこれまでに南京は四回取材したから、今回は五回目に相当する。『中国の旅』よりあとの三回分については、本誌で間欠的に連載ののち単行本『南京大虐殺』（朝日新聞社）『本多勝一集』第三巻（一九九七年）にまとめられている。ただし、五回目の今回は取材が目的ではなく、南京大虐殺の記念館「侵華日軍南京大屠殺遇難同

胞記念館」の呼びかけによる国際討論会に出席するためであった。なお今年には日本軍による南京占領七〇周年にあたり、南京市で大規模な記念行事が計画されている。これに備えて、記念館を大増築する工事も始められた。

役に立たない学生通訳

大阪から南京空港まで直行便で二時間。四回目の訪中からは一九年ぶりで、その当時とくらべても時間的には非常に近くなった。同じ便には、やはりこの討論会に出席する人間自然科学研究所（財団法人）の小松昭夫氏夫妻ら五人も一緒だ。南京空港には、記念館の館員らが出迎えて、その車で宿舎に向かった。宿舎は中山陵近くのホテルである。記念館がある南京市西郊のこの周辺は、森林の多い閑静な地域だ。通ずる道路のプラタナスの並木も、大きく育って両側から道を覆っている。

この日の夜は観光名所としての夫子廟（孔子を記念する廟）に案内され、そこから舟で秦淮河の夜景を愉しんだ。記念館員の常婦氏によれば、東京なら浅草にあたるような所

とのことだが、一九年前までは取材の聞きとりに明けられて、観光的なことはほとんどやらなかったから、当時とは変っているにせよ別の国かと見紛うほどである。

翌二三日は午前中に明陵を見学、午後は『新華日報』記者の取材を受ける。このときの通訳は大学の日本語科学生のだが、これが全く役立たない。中止させて交替させたのんだ。以前にもこんなことがあったが、ふしぎな一点は、まるで役立たぬことなど当人が分かるはずなのに、恥じる気配も臆するところもなく、こちらが中止させぬかぎり平気でつづける神経だ。新聞社にしても、テストもせずに学生をアルバイトに使うのか。これは練習ではなくて本番なのだ。若くても優秀な通訳がいるはずなのだが……

あくる二四日から二日間は国際討論会だが、それに先だって同日朝『新華通訳社』（ラジオ）と『江蘇新聞』の記者から取材を受ける。こんな通訳はまじだった。（つづく）

〔注〕「真正右翼を自認する」ことについては本誌二〇〇二年一月二十九日号「俺は、右翼ですからね」など参照。

いまだ続く冷戦思考の続きに警戒

第一日の九月二四日は、まず各界代表者が一〇分間ずつ発言することになっていったが、ほとんどは二〇分を超えていた。この会議には日中兩國のほかイタリア・イスラエル・デンマーク・アメリカ(合州国)・フィリピンからも参加者があり、その半分ほどは国籍が外国でも中国系であった。しかし「南京」という場所

と日中戦争にかかわる主題からしても、当然ながら圧倒的に中国の学者や自治体要人・証言者などが多く、次いで日本からの関係者が多かった。

中国の新聞記者との対応などもあって、私は全部を聞くことはできなかったが、印象に残るものを拾えば、午前中の中国抗日戦争史学会会長・何理氏は、六〇年前の日本による侵略戦争のころの日本人の認識と現在のそれに大きな落差がないことを心配し、小泉前首相をはじめ一部閣僚の靖国神社への態度を例に挙げて、アジア諸国と日本との友好関係進展に障害となっている事実を指摘した。

何理氏はこれを世界史の流れの中で見るとともに、冷戦構造は変わっても冷戦意識がまだ続いていることに警戒をよびかけた。関連して一部に中国脅威論があることに触れ、これは冷戦思考の続きにはかならずとも示した。

売国的なのはどちらか

そのほか三人ほどが発言したあと、全代表約一二〇人の記念撮影があり、さらに「侵華日軍南京大屠殺遇

難同胞記念館・特別貢献奨章」の授与式があった。受賞者は次の三人である。

高興祖(中国)故人・陳君実(中国香港)・松岡環(日本)・張純如(アメリカ)故人・東史郎(日本)故人・洞富雄(日本)故人・章開沅(中国)・張憲文(中国)・陳憲中(在米華僑)・本多勝一(日本)・林伯耀(在日華僑)・李自健(在米華僑)・李秀英(中国)

一三人の受賞理由と勲章を紹介する立派な目録が用意され、「特別貢献奨章」と記された木箱に直径七センチミリ・厚さ六ミリの重い円形金メダルがおさまっている。表は虐殺期間を記念する数字「1937・12・13—1938・1」の彫られた記念館入口の塔を背景に「特別貢献奨」が浮き彫りにされ、裏には「遇難者・被害者」として「300000」の数字が、館内の被害彫像群を模した背景に挟まれて大きく並ぶ。

この中で日本人は故人も含めて四人おり、面映ゆいことに私もその一人だが、いさぎよく受取ることにしよう。例えば金メダルというようなものを貰ったのは、七十余年の生涯

で初めてではないか。アメリカからは勲章の類こそ貰っていないが、八年前に「日本問題」の国際シンポジウムに賓客として招聘された。しかし日本国内では、反動出版社(といっても大部数の雑誌を販売する日本型「主流」出版社)から攻撃されつけてきた。考えてもみようと、実に単純な話である。こうした反動勢力の願うように日本がなれば、先週号で述べたようにアジアで孤立し、結局は「売国」的結果を招くことになるのだが……。

記念撮影のあとでは、朱成山・記念館館長が第二次大戦中の世界の被害状況を語り、ドイツによる被害の調査や広報活動に比べて「南京」が遅れた事情を説明した。フィリピン人の女性シスタ・ソフェビータン氏からは、日本軍による女性への暴力として、殺された女性二万人、強かんされた女性八万人と報告された。

午後の部の冒頭ではイスラエルの発言者が、日本軍による中国人とナチ・ドイツによるユダヤ人の、被害面における共通性について具体例とともに語った。

昨年九月二四日午前の発言者たち。この中で日本人は右から侯義文、一人おいて保村龍一郎、榊万里、桂良太郎の各氏、一人おいて本多勝一。(写真提供/筆者)



傷跡が生々しい侵略の被害側

南京での国際平和討論会第一日の午後は、三人目に日本人発言者として小松昭夫氏(財人間自然科学研究所)が「世界の平和は和議から」を講演し、つづいて大谷派の僧侶・大東仁氏が日本軍占領下の南京における宗教工作を語った。当時一三人の僧侶がいて、日中両軍の戦死者や民間人の葬儀にかかわり、実態は宗教を利用した宣撫工作だったと。

日本関係ではさらに大門高子氏の合唱朗読構成「紫金丹物語」が大きな感動をよびおこした。日中両国の合唱団によるこの公演は日本でも各地でやってほしいと思う。あとで大門氏から聞いたところでは、大門氏らがすすめている日中の歌声運動などについて新聞記者が書いても、紙面に出る前につぶされてしまつたという。大学で合唱団にいたことも合唱曲を作ったこともある者として、残念以上に怒りさえ覚える。他方最近の「反日デモ」の類については何度も報道される。中国に行けばわかることだが、あのデモはごく地域的な小事件にすぎず、南京でもほとんど問題にされなかつたようだ。

私にとつてとりわけ傾聴させられ

たのは、このあとの林伯耀氏の話であった。林氏は神戸市在住の二代目華僑である。報告は中国人強制連行の実態だ。一九九〇年にこのことを知つて調査を始めた。日本に連行されるや一三五カ所の現場で酷使され、一年半以内に約七〇〇〇人が死んだ。林氏らはその遺骨さがしをして、これまでに約三三〇〇人分を中国に送還した。さる八月一日に、天津市でそつとした連行労働者の追悼記念碑が完成して落成式に参列したという。戦後六〇年を経ても、侵略の被害側は傷跡がいつまでも生々しいのだ。

こうした記念碑には三つの意味があると林氏は語った。第一に「歴史を忘れるな」という日本人への警告。第二は遺骨さがしの労を厭わず、日本側の協力者もいることを忘れるなという中国人民への警告。第三は「靖国神社」が存続する現実への認識。A級戦犯がまつられているこの神社は中国人民の心を、一般日本人の想像をはるかに超えて傷つけている。

午後三時半からの休憩をはさんで二人目が私の番であった。侵華日軍南京大屠殺遇難同胞記念館の朱成山館長から私への要請は、南京大屠殺

それ自体に関する発表ではなく、平和についての見解を話すことだ。これは私のことには少し手に余る主題だと思つたが、結局「戦争と侵略と平和」と題し、私個人の過去も含めて現在の状況を語ることにした。以下はそのほぼ全文である。

南京陥落の旗行列

私の南京訪問は今度で五回目になります。今回は討論会に出席するためですが、これ以前はすべて南京大虐殺にかかわる取材でした。この間、南京市当局が協力をしてくださつたおかげで、実に多くの証言者から詳細な聞きとりをすることができました。最初は一九七一年で、以後一九八三年・一九八四年・一九八七年と計四回になります。最初の取材からですと今年でもう三五年になるのですね。私も七四歳になりました。

今日のお話の前半では、私個人と戦争とのかかわりを説明しておきたいと思ひます。

私は一九三二年末の生まれですから、これはまさに「9・18事変」(日本という「満州事変」)の年にあたります。日本軍は日清戦争以来中国

に残留しつづけていますが、この一九三一年をもって公然たる軍事侵略を始めたわけです。

このあと、上海を舞台とする戦闘や「7・7事変」(日本という「盧溝橋事件」)などで日本軍の侵略はくすぶっていました。一九三七年一月五日の杭州湾上陸作戦によって大規模な侵略となり、同年二月一日には南京占領に到ります。これが私の記憶に残る中国侵略での最初の事件となりました。なぜなら、このとき六歳になったばかりの私も「南京陥落」を祝う「旗行列」に参加したからです。

しかし、日本の中国侵略は、以後の中国軍や民衆の抵抗(とりわけ八路軍の反撃)によつて泥沼状態となります。そのあげくが真珠湾攻撃に始まる対米戦争・太平洋戦争でした。その結果、日本の敗色が濃くなつてゆき、やがて東京大空襲などで本土も危うくなるころ、私が(旧制)中学二年になつた一九四五年四月からは軍需工場が私たちの中学校に疎開してきて、中学生全員がその工場

で働かされました。その四カ月たらず後に日本降伏です。(つづく)